



選考委員特別賞
那須正幹賞

ヴェネツィアと私

ホーチミン日本人学校 六年

今村 瞳子

この旅行記は、私がイタリアに初めて行った時のコーファンがつづられている。中でも私の視点から見た「ヴェネツィア」を書いた。

二〇一五年 二月十五日

「ヴェネツィアが見えて来たー!!」私はコーファンして、シートから乗り出して、さげんだ。私のとなりにいる父も、うれしそうだ。

そう、私はイタリアに来てしまったのだ。コトの始まりは、半年以上前にさかのぼる。

「えーっ、いいのお??」

私は、ビックリしすぎて、声も出なかった。妹も、いいのお?? とか言ってるけど、かなりビックリしてる。

「そうだよ。璃子も瞳子も、大きくなったし、何より父さんが、一番イタリアに行きたいし。」そういって、父は笑った。「何みんな、そんなに暗い顔してるんだよ。みんな行きたがってたじゃないか、イタリアに。特に、ヴェネツィアに行ったらちようどカーニバルの時期じゃないか。今いくしかないだろう。」

「おっ、お金は大丈夫なの?? ヨーロッパに行くとなったら、かなりのお金が必要なんじゃないの??」
と、私がおそろおそろ聞く、

「大丈夫さ。そのくらいのとくわえはあるし、平気、平気。」

と返された。そうか、お父さんの給料って、見かけによらず高いんだー。と感心していると、妹がとつ然、メソメソ泣き出した。なんでかわけを聞くと、「イタリアに行きたくない。」と言う。なんだコイツ、せっかくイタ

リアに行けそうになっていたのに。と私は思っていたが、母は、「どうして行きたくないの。」と問いつめた。すると、皆勤賞をとりたいたからだという。妹は私とちがいで、元気なので毎日休まず学校に行っているのだった。

しかし、イタリアに行くためには二日程休んで、旧正月に入る前に行かなければならないのだ。二日もズル休みしたくない、と妹は言うのだった。泣く妹を説得して、やっと飛行機がとれた。妹はその後もイヤイヤ言い続けていたが、イタリアに行く三ヶ月程前に、カゼをひいて休んだ。つまりイタリアに行っても行かなくても、皆勤賞はとれないということだ。これで、妹の皆勤賞熱もおさまり、家族みんな、イタリアに行くことに賛成した。

話をもどそう。ヴェネツィアについて私達四人は、水上タクシーでホテルへと向かっていた。冷たい水しぶきが顔にかかって、寒い。風は強くて、下手したらふき飛ばされそう。ここで少し、ヴェネツィアについて説明しておこう。ヴェネツィアは、イタリアの北部に位置している。アドリア海に面していて、昔は海洋都市国家

として栄えたらしい。(くわしくは塩野七生著「ヴェネツィア共和国の一千年」を参照) ヴェネツィアの一番の特ちょうは、海の上に町が建てられていることだ。そもそもヴェネツィアは、敵がせめてきて陸地に逃げ場がなくなつて、干潟に逃げ、家を建てたからできた。だから、ああいう町並になったのだ。橋が多く、ゴンドラが行きかう神秘的な感じに。

最初、ヴェネツィアの運河を見たときには、本当に感動してしまった。エメラルドグリーンに、ちよつと青をたしたような色。まるでヒスイみたいだ。水上タクシーから見える景色も、すごく面白い。橋の裏には何やら書いてあったり、ちよつこくがしてあったり、橋の上の人と手をふったり、窓辺にすわっている人と目があつたり。青く、ぬけるような空を、ハトが飛んでいる。とてもステキだ。建物はレンガでできていて、とっても古めかしい。何百年も前のものもきつとあるだろう。でも、さすがにドアはれつ化するのか、ドアは新しい。そして、たいいていの家は小さな船着き場があった。

ホテルに着くと、中は暖かい。ほっこりするような不思議な暖かさだ。部屋に案内された。一ねむりしてから出かけようということになり、ゆっくりくつろいだ。今までたまってきたつかれを、いやすためにねた。

夜ごはんは、路地にある店で食べるらしい。地元の人もあるような、人気店なのだそう。ヴェネツィアの街は、迷いやすい。まるで迷路みたいに、道が入りくんでいて、わかりにくい。そしてどの道も似てるし、家もソックリ。今回も、迷って迷って迷った末に、やっとたどりついた。店につくと、まだ開いていなかったの、ちよつと散歩してみた。あちこちの店をのぞく。おもしろい感じが、むんむんとただよう店もあったし、なにやらあやしげな物を売っている店もあった。しばらくぶらぶらしていると、開店時間になったというので入った。あーっという間に満席になった。早くついてよかったね、と、話した。

そうこうしているうちに、オーダーしなきゃ、ということになった。色々注文して、まだかまだかとまってい

たとき、となりの人（女の人です）が、一人でピザを平らげていた。すっげー!! と思った。私だったら、一人じゃ食べられないなあと、じーっと見ていたら、「そんなに人を見ない!!」と母におこられた。でも、ほんとはイタリアって面白い!! と思った。日本じゃ絶対ない。すごいきちょうな体験をしているんだと心から実感した。

オーダーが来た。最初は生ハムの盛り合わせだった。日本だったら、大きいお皿に五〜六枚、ちよちよつとのおつるだけで、そのかわりにかざり、盛り付けにこつてるけど、イタリアはちがう。大きいお皿に二十〜三十枚、所せましとならんでいる。盛り付けなんて全然してなくて、そっけないけど、生ハムはとってもおいしかった。

次から次へと料理が来た。どれもおいしかったし、日本ではみられないような素材を使った物もあった。日本人がいなかったのが気楽だったし、他の人もワイワイ飲んで食べているので、気にせずしゃべれた。いい気分

店を出た私達は、また迷い迷い、ホテルにたどりついた。夜のヴェネツィアも、活気があって楽しい。人気がない所でも、時おり人の笑い声や、橋をコツツ、コツツと渡る音がする。ヴェネツィアに来てよかったな。そう思いながら、目をとじた。

二月十六日

目を開けたら、外はまだ真っ暗だった。早朝の運河を見てみよう、窓を開けると、さすように冷たい空気が入ってきた。鼻をすすりながら、ベランダに出た。そして、早朝のヴェネツィアの街を、長いこと見続けた。

たまに、カラスや何鳥かわからない鳥が、家と家の間（つまり、運河）を横切っていく。冷たい空気をかき切るように、ゆっくり、ゆっくりと飛んでいく。だんだん、潮が満ちてきた。少しずつ、水位が上がっていく。そうやって運河をながめていて、かれこれ三十分そこにいた。鼻水の量がハンパじゃなくなって来たので、部屋にもどる。もどって見たら、父もおきていて、電子書せ

きを読んでいた。「今、何時?」と私が聞くと、三時半だと言う。時差ボケのせいで、早く目覚めてしまったらしい。少しねないと、一日もたない。そう思って、グツスリねた。

「瞳子、おきなさい。」という母さんの声ではねおきた。今日は、いーっぱい見て、聞いて、食べるんだ。あわてて服を着がえる。こういう時に限って、タイムがうまくはけない。ウーンとうなって、もう一回はき直そうと、タイムズを見たら、後ろ前だった。(トホホ…)

朝食はどこで食べるのか、よくわからなくて、あちこち探しまわったあげく、やっと見つけた。客はあまり多くないらしく、食べる所はとてもせまかった。それでも料理はおいしかった。しかし、コーヒーはあまりおいしいとは言えなかったらしい。(イタリヤから帰って来た後、母が言っていた) なんてだろう。

朝食から帰って来て、ゆっくりした後、出かけることにした。細い裏通りから外に出る。仮面を売っている店があったので、ちよつどのぞいてみると、中は仮面だら

けだった。三百個以上の仮面が、ずらりと並んでいる。それも、一つ一つちがって、ラメが入っているのがあつたり、形にこつていたり、見ているだけでワクワクしてくる。母がたずねた。

「これは全部、イタリア製？」

「いいや、外に出してある、安いのは中国製さ。」と、店の人が答えた。

へえ、そうなんだー。そういうこだわりがあるのか。おもしろーい!! と思いながら、店を出た。トコトコ歩いて行くと、なんかすごい人達に出くわした。顔は真っ白な仮面でおおわれていて、中世風?? っていうのかな、女の人はふりふりドレスだし、男の人は、モーツァルトやバッハが着てるような服を着てた。かぶり物も、またすごい。女の人はでっかい(頭の2倍!!)ボンネットみたいなのをかぶってるし、男の人は、これまた、バッハみたいなかつらをかぶってる。こっ、これこそ、変そうだ!! ガイドブックによると、これを作るのに何十万円とかかるそう。大変だなあと思って見ていると、家

族においてかれそうになった。あわてて追いかける。迷路のようなヴェネツィアでは、迷子になったら一卷の終わりだ。角をまがったら、やっと追いつけた。今日の行き先を聞いてなかったな、と思って父に聞くと、美術館だと言う。こりゃあ面白そう。しかも、あと二十分くらいで着くらしい。木製の橋を渡って、向こうにつくと、目の前に、どっしりとした建物がたっている。看板には「アカデミア美術館」と、イタリア語で書かれていた。中に入ってみると、カラヴァッジョやティツィアーノ、ヴェツィア派の巨匠たちの絵やちょうこくが、いっぱい飾られている。モダンなふんい気の部屋もあれば、天井よう画がかかっている古めかしい部屋もあつて、とても面白かった。

そろそろお昼ということ、アカデミア美術館を出た。そしてレストランへ向かった。そこにたどりつくまでに、色んな店をのぞいた。アメなのかソフトキャンディーかよくわからないけど、パッケージが本当にかわいい。なので、食事が終わったら、買うことにした。

レストランの中はエノテカ風で、お昼にチャチャッと飲みに行って、チャツチャツと帰る感じだ。とてもこじんまりした店構えで、席数もそんなに多くない。でも、ワインの種類はすごく多くて、ワイン倉庫が店の三分の二をしめている。とてもお酒にこだわりがある感じがある。

オーダーしようと、メニューを見ると、全てがおいしそうに見える。実際、そうなんだなあと思った。とりあえず、前菜を一品と、スタ二品をたのんだ。注文をとりに来てくれたおじさんも、またいい感じのする人だ。きっと、お酒が大好きなんだと思う。「ワインはどうされますか？」おじさんは聞いた。「私的には、コレとコレがおススメです。ああでも、コレも合うかもしれませぬね。」そう言いながら、ニッコリした。父は、それの中から一コ（ビン??）選んで、オーダーしていた。さっきのおじさんの様子からすると、このお店はかなり期待できそうだ。オーダーが来た。予想通り、おいしそうだ。あまりおいしそうだだったので、写真もとらずに食

べ始めてしまった。はっと気がついた時には、お皿はスツカラカンだった。と中で日本人が入って来た。そわそわして、落ちつかない。ちょっとメンドクサイ。まあ、気をとり直して、デザートをたのんだ。私はヨーグルト系の物にした。妹はパンナコッタ（牛乳かんみたいなやつ）をたのんだ。これがまた、本当においしい。ちょっぴり酸味のあるヨーグルトは、ベリー類とよく合う。妹のパンナコッタもおいしかった。

いい気分で店を出た。石だたみを歩くと、コツコツと音がする。だれかのコツコツにあわせて、私も歩く。イタリアに連れてよかったと、やっぱり思う。

ホテルについて、また一休みしてから、観光に出かけることになった。時差ボケはまだ直らなくて、時々フツとねむくなる。とにかくねた。

気がつくと午後で、母の顔が目の前にあった。「早く支度しなさい。閉館時間に間に合わなくなっちゃうじゃないの。」何のことだかよくわからなかったが、あわてて、マフラーとコートをつけた。

サン・マルコ広場に行つて、ヴェネツィアの名所、パ
ラツォ・ドゥカーレの中に入った。パラツォはイタ
リア語で「宮殿」という意味だそう。ここでは、当時
のヴェネツィアのリーダーが住み、政治が行われていた
のだ。中に入ると、中庭のような、解放的な空間が広
がっていた。はじっこには、堂々とした彫刻つきの（た
ぶん大理石）階段があつて、上の回廊へとつながってい
た。よく見ると、段の真ん中がすりへっている。大昔の
人々も、ここを上がつていったのだろう。そう思うと、
イタリアつてやっぱりすごいと感動した。（これで何回
目??）。ガイドブックによると、この階段は「巨人の階
段」というそうで、この階段を通過して、当時の政治機関
が置かれていた部屋に行けるそう。でも、今は使われ
ていないのか、階段の前に、テープがはられていた。そ
れの隣に、「見学入口はあちらです。」みたいな矢印形の
立て札があつたので、指示通りに行つたら、人がいっぱ
いいたので、安心した。

2階の部屋は、みんな金か漆喰で縁取られた天井画が

あつて、壁にもたくさんのこれまた金で縁取られた絵が
かかっていた。何を意味しているのかわからない絵も
あつたし、ヴェネツィア共和国を代々仕切ってきた人達
の絵とか、なんだかキリストっぽい人がだれかいうでを
つかまれている絵とかもあつた。本当に豪華だった。

ただ、一つの部屋だけは、雰囲気違った。質素で、
かび臭くて、窓には鉄格子がはまっている。隣のツアー
客に、ガイドさんが説明していた。「この先に、『溜め息
橋』があります。その先には牢があつて、この橋を渡る
と一生出てこれないことから、『溜め息橋』と呼ばれ
るようになりました。牢には、水責めで殺せる仕掛けが
ついています。水に困らないヴェネツィアらしいやり方
ですね。」ガイドさんは淡々と語っていたけど、この話
……すごくこわい。しかも本当のことなんだから、こわ
さ倍増。

「はあー。」溜め息をついて、私達は足早にそこを立ち
去った。建物の外に出ると、もう日が暮れかかってい
て、太陽はキラキラとオレンジ色の光を、運河に投げか

けていた。

再びホテルにもどって、すこし休けいしてから、外に出た。外は身も凍る程の寒さで、ムートンブーツをはいていても、足がぶるぶるふるえる。やっと店について、暖かい空気がもわーんとやって来た時は、ホッとした。ここのお店のミネストローネは本当においしくて、深いダシの味と、野菜のうまみが口の中いっぱい広がる。これを飲んで、私はなにやら安心したのか、深いねむりに落ちていた。(後で聞いた話によると、他の料理もおいしかったらしい。)

二月十七日

朝、下に食べに行くのと、アジア人っぽい顔立ちの男の人が、料理していた。アジアにいる時はなんとなく「敵」だけど、こっちはと親近感を感じた。なんでだろう。

今日は、本当はガラス工の島、ムラーノ島に行く予定だったけど、妹の風邪がひどいので、リアルト橋に行くことにした。リアルト橋は、観光客でごった返していた。まるで人がアリみたいだ。たぶん、橋の上に二百人

以上のってるんじゃないだろうか。人々をかきわけかきわけ、やっと橋を渡り終えた。この通りにはみやげ物屋がズラリと並んでいた。特に、ガラス細工の店が多かった。けっこうかわいいものもあったけど、値段がおそろしく高い。親指の二分の一くらいのサイズでも、二十ユーロ(当時、一ユーロは百四十円位だった)もする。なのであきらめた。

お店に着いた。中は海賊風の装飾がほどこされている。どうやら、海鮮物が売りのようだ。私は、甲殻類アレルギーなので、トマトソースのニョッキにした。妹もトマトソースの Pasta にしていた。父と母は、海産物の Pasta をたのんだ。

トマトの Pasta は、思いのほかおいしかった。新鮮でおいしいトマトを使っているのだろう。トマトソースそのものが、素直で優しい味だった。ニョッキも、トマトソースとよくからむ、ベストパートナーだった。

いやいや、本当においしかったね、と言いながら店を後にした。イタリアは、どんなところで食べてもハズレが

ない。これを毎日食べてるイタリア人て幸せだなど思った。

妹の風邪が悪化して来たため、早めにホテルに帰り、ゆっくりした。二時間程ねた妹は、すっかり回復した。

どこかいける所はないかと、ガイドブックをめくっていたら、「サン・ザッカーリア教会」という所が目にとまった。ピンクと白のレンガでできた、とてもかわいらしい教会だ。近そうだし、行ってみようか、ということになった。外に出ると、鐘の音が聞こえて来た。お寺の鐘よりも、もう少し高い音だ。すんだ空気と、鐘の音が妙にマッチしていた。

教会の中は、とても静かだった。しーん、という擬態語がびったりだ。人もまばらで、聞こえるのは、何人かの足音だけだった。大きな窓からは太陽の光がいっぱい差しこみ、明かりがなくても大丈夫だった。そのふんい気が、私は好きになった。かれこれ三十分もそこにいただろうか。

ホテルに帰って、また少し休けいした。今夜行くお店

は、大人向けの店なので、開店がおそいらしい。一時間程休けいし、また出かけた。ちよくちよくお店を見て回りながら、目的のお店に着いた。中は照明が落としてあって、大人が飲みにくるようなふんい気だ。さっそく、料理をオーダーした。まだかともっているうちに、三人程お客が入ってきた。その人達はみんな仮装をしていた。その人達を見ていたら、料理が来た。最初に来たのは、スープだった。一回飲んでみたら、何の野菜が入っているのか、全然わからなかった。でも、何だろう。この深みがあってコクがあって、優しい味は。聞いてみると、長ネギだという。

— 二このお店の料理は、ヴェネツィアで食べた中で一番クオリティーが高かった。意外な食材で意外な味を作るというのには、感心した。私達は、いい気分分て店を出た。

二月十八日

水上タクシーから、私は遠ざかっていくヴェネツィアを見ていた。あつという間の三泊四日だったけど、とつ

でも楽しかった。楽しませてくれてありがとう。感謝の意をこめて、カいっばい手を振った。見えなくなるまで、ずっと、私は手を振り続けていた。